

大井野

おおいの



十和・大正方面から窪川の街中への入り口にあたる四万十川に架かる橋。その手前に広大な農地が続く。国道381号が農地群を貫いて真つすぐ伸びる。この直線の両側が大井野である。

集落は地区の西側の小高い山裾に沿ってまとまっている。現在66世帯、143人の人々が暮らしている。

明治23年の大水害までは、この山裾沿いだけではなく、四万十川沿いにも集落が点在し、多くの民家が軒を並べていたという。大水害以前にも何度か洪水に見舞われることはあったが、さすがに明治23年の大水害の被害は甚大で、以降住宅は現在の地に集められたらしい。

今でこそ、四万十町の中で一二を争うくらいのもまとまった平坦な農地が広がっているが、実は大井野の農地としての歴史はそれほど古くはない。農業用水の灌漑技術がない時代には四万十川から水をくみ上げるわけにもいかず、この辺り一帯は荒野であった。戦国期には多少の農地はあったものの人家も少なく、西原分と窪川分に含まれていた。

江戸期に入って、高塚六大夫他数名の有志らが知恵を絞り、松葉川から水路を引き、荒野を開墾したと伝えられている。それ以降、大井野は新



水路は広大な大井野の農地の生命線。春になると勢い良く水が流れる

田開発が進み、元禄時代になると高岡郡内の新田村としては最大となった。人口も170人を超えていたという。窪川山内氏にとっても、家臣に与える農地として大変優良な土地となったようである。現在でも、大井野地区では高塚六大夫らは、大切に祀られていると聞いた。

さて、大井野の地名の由来であるが、ある古文書によれば、弘法大師が五社さんを作ったときに、山伏が自らの笈（修行僧などが仏具や衣類などを入る背負う箱）とともに弘法大師を背負ってくれたという。そのことへの感謝をこめてこの地に「笈神」という神様を祀った」という意味のことが記されている。したがって、そもそも「笈野村」といった。それがいつの頃からか「大井野」と書くようになったと記録されている。戦国期にはこの地はまだ開墾されておらず、「村」にはなっていないものの、地帳にはすでに「大井野」の地名がみえる。

町のうごき	(9月30日)		前月比		出生		死亡		転入		転出	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	8,591	9,590	-18	-13	5	4	16	9	15	8	22	16
	18,181	計	-31		9	計	25		23	計	38	
	8,648	世帯数	-7		(9月中の届出)							

四万十川の 水質状況	適正值(mg/l)	10月2日
リン酸	≤ 5.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.20
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以上

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/> ●

※ 広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)